2016年 3月29日
第3種郵便物認可

半導体漫遊記 ⑫⑨

湯之上隆

元エルピーダCEO、新たな挑戦
DRAM設計開発会社設立

日本で唯一のDRAMメーカーだったエルピーダは、2012年2月に経営破綻し、米マイクロンに買収された。そのときCEOだった坂本幸雄氏は、その思いを著書『不本意な敗戦』（日本経済新聞社）にして出版した。その坂本氏が昨年新たに、DRAMの設計開発会社「サイノキングテクノロジー」を設立した。

同社のHPには、『サイノ＝中国の、キング＝王、つまり「中国で圧倒的に優れたDRAMを作っていきたい」というコンセプトのもとに生まれた会社』であると記載されている。

サイノキングは、日本と台湾で計約二百数十名の技術者を採用し、このメンバーの経験と技術力を核として、2017年中には日本、台湾、中国合わせ、1000人規模の技術者を有するメモリ開発会社にする計画であるという。

そして、サイノキングは中国安徽省合肥市の地方政府が進める約8000億円をかけた先端半導体工場プロジェクトに中核企業として参画する。その際、サイノキングが次世代メモリを設計し、生産技術を供与する。

つまり、いったんDRAMで『不本意な敗戦』を喫した坂本氏が、日本と台湾の技術を基に、中国の資本を利用して、ファブレスとしてDRAM事業に再挑戦するということである。しかし、それには、越えなくてはならない壁が存在する。

その壁とは、サイノキングが「1000人規模の（日台の）技術者集団を形成できるか」ということだ。（日台の）と書き加えたところがミソで、たとえ1000人の技術者を集めることができたとしても、そのほとんどが中国人だった場合、成功はおぼつかない。その理由は以下の通りである。

半導体の開発や製造には、数百人規模の技術者のチームワークが必要不可欠である。ところが、個人主義的な気質の中国人は、そのようなチームワークが苦手なのだ。

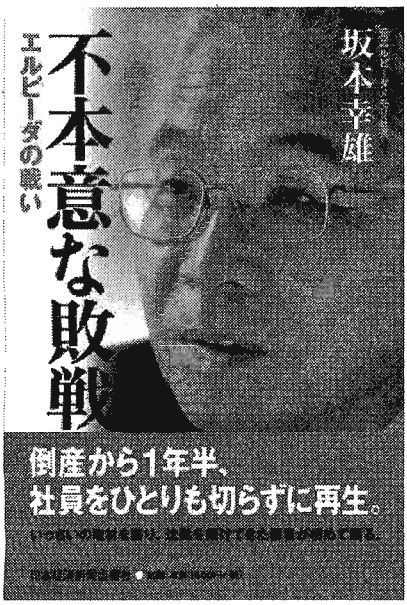
その結果、2000年に設立された委託製造専門のファンドリー・SMICでは、中国人がチームワークを毛嫌いしたためか、中国人技術者が育たず、そして定着しなかった。そのため、SMICは、長期にわたって赤字を計上し、低空飛行を続けてきた。

そこで中国は、「中国人は半導体の開発や製造が苦手」であることを克服するため、昨年来、国家政策として、世界の半導体メーカーを〝爆買い〟している。これは、中国人技術者による国産半導体企業の立ち上げを断念し、技術者込みで諸外国の半導体メーカーを買ってしまおうという方針に転換したことを意味する。

このような状況の中、サイノキングが設立された。1000人の技術者を集めることも大変だが、その中味が問題である。（日台の）技術者を中心に1000人集められるかどうかが、勝負どころである。

坂本氏が、再び『不本意な敗戦』をしないためには、何としても乗り越えなくてはならない壁であると思っている。

（微細加工研究所・所長）



坂本幸雄著『不本意な敗戦』日本経済新聞社